

次世代

子供と社会をつなぐ 「キッザニア甲子園」

住谷栄之資 キッズシティージャパン代表取締役社長 兼 CEO



子

供たちに、現実さながらの社会体験を――

二〇〇九年三月、「キッザニア甲子園」がオープンした。

実物の約三分の二サイズの街並みに、実在する企業がスポ

ンサーとなったパビリオンが並ぶ。体験できる職業は約八十種類。街は「大人の時間」である夕暮れ時の設定で「こんばんは」の挨拶が飛び交うなか、各パビリオンで仕事を終えた子供たちは、対価としてキッザニア内の通貨「キizzo」を受け取る。街で買い物や習い事ができるほか、銀行に預金してATMで引き出すこともできる。子供たちは楽しみながら自然に、働くことの意義や社会の成り立ちを理解していく。

二〇〇四年にメキシコでキッザニアに出会い、子供たちが楽しみながら社会のしくみを学ぶというコンセプトに惹かれた。日本での展開を決意して会社を設立、二〇〇六年には「キッザニア東京」をオープン。スポンサーへの説明に奔走するなか、これは今の日本に必要なものだという思いはさらに強まった。

子供の頃から社会と接点を持つこと。それが今の日本には欠けている。私の子供の頃には、家畜の餌やりや薪割りなど、子供でも家の仕事を任された。祭りなどで地域とのつながりも

あった。今思えば、そういった体験を通じて世の中のことを自然に学んでいた。

しかし今、子供を取り巻く環境は大きく変化した。家族そろっての夕食はほとんどなくなり、子供に家の手伝いをさせるより、学校から帰るとすぐ塾に向かわせる。友だちと遊ぶ時間も場所もない。何もない野原で自分たちで遊びを考案していた私たちの子供時代と異なり、今はまちなかに広場がないし、遊び道具がないと遊べない子供も増えている。今になって不登校やいじめなど、子供をめぐるさまざまな問題が噴出しているのは、物質的豊かさの追求に偏重し、人間のあり方や関係性をおろそかにしてきた「つけ」ではないか。ここで一度立ち止まり、子供たちと社会との、失われた絆を回復しなければならぬ。

キッザニアの街には、社会のしくみがコンパクトに詰まっている。サポートするスタッフは、子供たちを大人として扱う。そのせいか、子供たちは真剣そのもの。指示待ちでなく、自分から動く。そうやって実際に自分

兵庫県西宮市にある
「キッザニア甲子園」





都市 都市ブランドの確立へ 「水都大阪2009」 北川フラム 水都大阪2009 プロデューサー



大阪の都心に「ロ」の字形に川が流れている。北は堂島川と土佐堀川、西に木津川、東に東横堀川、南に道頓堀川。世界に類のない、この「水の回廊」を中心に、水都大阪の再生が始まっている――。

大坂が「天下の台所」として

の手でピザを焼いたり、停電復旧工事に出向いたりする体験は何ものにも代え難い重みを持つ。仕事を通じて社会に役立つことの喜びを実感できるし、見えないうちでいつも誰かが働いているおかげで社会が成り立っていることもわかる。

キッズニアにはリピーターが多い。何度も足を運ぶ要因の一つは「悔しさ」ではないか。どんな職業体験も、一回目ですべてうまくできることは少ない。失敗して悔しい。でもそこで諦めるのではなく、また挑戦する。キッズニアは、そうやってチャレンジする場でもありたい。何度来ても楽しんでもらえるよう、スタッフは日々何かを改善する努力をしている。裁判所では少し前から裁判員制度の説明も始めた。現実の社会と密接にリンクさせ、スポンサー企業とも協力し、日々新しい工夫を加えている。

関西にオープンするにあたっては、地域の人に身近に感じてもらえるよう、地元企業に参加してもらうことが欠かせなかった。だから、ここでは約五十社



栄えていた江戸時代、「水の都」「八百八橋」と形容されるとおり、まちなかには縦横に川が流れ、水辺は市民の生活に極めて近い場所だった。当時、大坂には、商人だけでなく、学者、文人、芸術家等、日本中から志を持つ人々が集まって来ていた。二十世紀初頭にパリが、ピカソやミロやダリなど他国から才能ある人を受け入れることで、世界に冠たる芸術の都となったように、大坂も多様な人材を受け入れることで都市と人のパワーを蓄積していた。しかし戦後、大阪の川の大半は埋められ道路になった。水辺は遠い場所になり、経済の地盤沈下とともに、こうした人のパワーも弱まった。そこで、数年前から進めてき

のうち約三分の一は地元の電力会社や電鉄会社などだ。

体験する職業自体は東京も甲子園もさほど差はないが、文化は都市や地域によって異なることが多い。特に関西には異なる歴史・文化を持つ都市が多い。この三月に、古都・奈良とモダンな港町・神戸を結ぶ阪神なんば線が開通したこともあり、関西文化圏の交流がさらに深まっていくのを感じる。異なる文化が融合することにより、新しい文化が生まれるのではないか。もちろん関西には、宮大工の技術や能楽などの古典芸能、伝統工芸など、なくては困る文化がたくさんある。伝統的な



た中之島公園や八軒家浜など中之島周辺整備がほぼ完了したことから、淀川改良工事竣工百周年でもある二〇〇九年をシンボルイヤーと位置づけ、八月二十二日～十月十二日、水都大阪の魅力を出し広く発信するシンボルイベント「水都大阪2009」を開催する。五十二日の会期中、連日連夜、水辺やまちなかで多彩なプログラムを展開していく。

特に今回、水の魅力再発見の媒介としたのが、アートの力だ。日本では相変わらず東京一極集中が課題となっているが、世界に目を向ければ、各地で個性豊かなクリエイティブシティ等、芸術文化による都市再生の成功例が生まれている。例えばフランス西部の都市ナントは、Tシャツで楽しめるクラシック音楽祭「ラ・フォル・ジュルネ」などに力を入れた結果、企業進出も相次ぎ、今やパリ、バルセロナに続く芸術文化都市に変貌しつつある。

こうしたアートの力で都市を変えるべく、水都大阪2009には、全国から百組を超える

中之島公園「水辺の文化座」(イメージ)



職業体験ができるイベントなどを通じて、キッズニアとしても、関西の新しい文化づくりのきっかけを提供していければと考えている。【曜】

すみにに えいのすけ
キッズナイージャパン代表取締役社長
兼 CEO
一九四三年和歌山県生まれ、大阪府出身。慶應義塾大学商学部卒。藤田観光を経て、外食産業に携わる。二〇〇四年メキシコの「キッズニア」の存在を知りライセンスの獲得と日本への誘致を決意し、キッズナイージャパンを設立。〇六年「キッズニア東京」、〇九年「キッズニア甲子園」をオープン。
<http://www.kidzania.jp/koshien/>





八軒家浜「船着場プログラム」(イメージ)

アーティストが集結。いわば「日本のオールスター」による最先端アートが水都を彩ることになる。例えば、中之島周辺にある大阪を代表する近代建築・公共空間とアートのコラボレーション

ンで、輝かしい近代大阪の歴史を再認識してもらう。あるいは夜、中之島の水辺の橋を美しくライトアップするとともに、幻想的な光の演出やアーティストによる光の作品で中之島公園を

「灯りの島」に変え、水都の新しい夜の楽しみ方を提案していく。より身近なところでは、体験型ワークショップやダンス、パフォーマンスなど参加型イベントにより、アーティストと市民の交流ネットワークの創出も図りたい。

さらに川が都市の物流や人の移動を担っていた時代を想起できるプログラムもある。例えば、かつて京都から淀川を下る船の発着場として賑わった八軒家浜では、会期中、旬の味覚や全国の特産品を積んだ船が到着、新しい水辺の賑わい拠点として朝市やマーケット・カフェを開催する。また水の回廊周辺では、市民の案内によるまちあるきや、船による川巡り——大阪を川から眺めるという非日常的な体験もできる。

今回の水都大阪2009は、さまざまなNPO・団体や市民が企画運営に携わるのも大きな特徴だ。まちづくりの担い手である市民が主体的に関わることで、大阪が失いかけている「人のパワー」を取り戻し、次の社会のエンジンにしたいと考えて

いる。幸い、先日開催したサポーター説明会には、定員を大幅に上回る人が集まってくれた。「こんなご時世だからこそ、何かオモロイことをやってみたい」。そんな市民の声を数多く耳にし、イベント成功への手応えを感じた。

もちろん今回の試みは、単なる一過性のイベントではない。開催後に水都という都市ブランドや魅力的な都市景観、まちづくりのしくみなどを将来に継承しようというもの。ぜひ会場に足を運び、まずは水都大阪の魅力を再発見してほしい。

躍

きたがわ ふらむ
アートディレクター

水都大阪2009プロデュサー
一九四六年新潟県生まれ。東京藝術大学美術学部卒。アートフロントギャラリー主宰。女子美術大学教授。都市建築まちづくりにおけるアート計画などを手がける。代表的なプロジェクトに「ファール立川アート計画」「大地の芸術祭―越後妻有アートトリエンナーレ」「大阪アイトカレイドスコープ」など。
<http://www.suito-osaka2009.jp/>

編集後記

心躍る広報誌を目指し、昨年創刊した『躍』。一年目は温暖化について総合的に考えてきましたが、二年目に入った今号からは低炭素社会づくりに向けて多様な分野の課題や動きを取り上げていきます。

今回のテーマは「都市」。ビルの間からも瑞々しい緑が目惹く季節に、内山洋司さん、正司健一さん、岡部明子さんにお集まりいただいた「鼎談」では、サステイナブルシティ、低炭素都市のあり方について語っていただきました。

高密度なら高密度な都市なりに、低密度なら低密度な地域なりに、低炭素社会への「解」はあるというお話に力を得て、「ルポ」では、大阪・中崎町、奈良・宇陀松山、和歌山・龍神村、滋賀・小舟木エコ村という異なるまちを歩き、それぞれの「ま

ちの営み」と持続的発展の方策を探りました。
また「エコルーツ紀行」では、特に鼎談でもクローズアップされた「公共交通」を軸にコンパクトなまちづくりに取り組む環境モデル都市・富山市を、作家の関川夏央さんと訪ねました。実際にライトレールや路面電車、ライダーバスに乗り、また新しい試みである電動ボートにも試乗させていただき、中規模都市の将来に希望が見えた気がしました。

いよいよ暑さが本格化する夏——それぞれの都市や地域に夏を乗り切る元気をお届けする『躍』でありたいと願います。

躍

題字 森 詳介(関西電力株式会社取締役社長)

『躍』(やく)という誌名は、皆さまとともに「躍進」「飛躍」していきたい、また皆さまにとって「心躍る」広報誌でありたい、との思いを込めて名づけました。

『躍』の内容はホームページでもご覧いただけます。
<http://www.kepco.co.jp/yaku/>

発行●関西電力株式会社 地域共生・広報室
発行人／八嶋康博 編集人／多田恭之
〒530-8270 大阪市北区中之島3丁目6番16号 電話06-7501-0240
企画／編集●株式会社エム・シー・アンド・ピー